

## 昭和63年度日本気象学会奨励金受領者選定理由書

**受領者:** <sup>めかるしんせい</sup> 銘苅眞正・<sup>きんじょうかつしげ</sup> 金城勝重 (南大東島地方気象台)

**研究項目:** 亜熱帯地方における降雨と静止気象衛星から見た積乱雲やそのクラスターの振舞い

**選定理由:** 銘苅会員は、昭和38年琉球政府立南部農林高等学校を卒業後、石垣島測候所に就職し、那覇航空測候所、沖縄気象台を経て、現在は南大東島地方気象台で予報官として勤務している。

同会員が最初に手掛けた研究は、上司との共同による「レーダー・ダクトによる天気解析への利用法の一試行」(1967: 琉球調査報告第21号)であった。昭和45年には、「全琉予報レーダー技術検討会資料」の作成に参画し、同僚と「雨に関して予報をはずしやすいパターンについて」を詳細に調査している。また、昭和60年にも「大雨注・警報の地域細分発表の可能性について」(1986: 沖縄管内気象研究会誌, 14)を発表しているが、以上の成果は地域の子報業務への応用に供されている。

昭和46年、同会員は突風現象の解明に取り組み、「石垣島における暖気突風」(1972: 琉球調査報告第26号)を発表した。昭和62年には、沖縄本島における強風継続時間について調査し、じょう乱別および地域細分別出現状況を明らかにしている(1988: 沖縄管内気象研究会誌, 16)。

金城会員は、昭和47年愛知教育大学教育学部地学科を卒業後、石垣島地方気象台に就職し、沖縄気象台、名護測候所を経て、現在は南大東島地方気象台で技術専門官として勤務している。

同会員は、主として予報業務に従事し、昭和55年、石垣島の大雨および前年の宮古島と沖縄本島における大雨の解明に取り組んだ。また、同時に「エコー強度の消長についての子想法」にも取り組み、K-H法による検証やK-Y指数の利用についても研究している。昭和56年には、同僚とレーダー、アメダス、衛星資料を使った短時間雨量予測手法について研究しており、以上の成果は、予報技術検討資料として詳しくまとめられている。雨量予測手法については、管内気象研究会においても、「レーダー・エコーの補外による雨量予測の検証」(1982: 沖縄管内気象研究会誌, 10)として発表されている。

このように、両会員とも地域に密着した調査研究に

取り組んでおり、地域気象の解明に大きく貢献してきた。両会員は、現在、亜熱帯特有のシビヤー・ウェザーを伴うスーパー・セルの特性を明らかにして、短時予報の基礎確立等に役立てようと計画している。この種の研究が階地性の最も高い厳しい職場環境の中で推進されることは、今後の気象学および気象業務の発展に寄与するものと考え、本学会はここに奨励金を贈るものである。

**受領者:** 大野木和敏 (仙台管区気象台)

**研究項目:** 地域気象現象の解析

**選定理由:** 大野木会員は、昭和59年気象大学校を卒業後、福島地方気象台に配属され、昭和62年仙台管区気象台予報課に転任した。この間、多忙な気象業務のかたわら、様々な調査研究に取り組み、地域気象現象の解析を行ってきた。

昭和50年には、09時の仙台・輪島・館野の大気状態曲線から、パソコンを使って不安定エネルギー、対流発生に必要な加熱量、予想降水強度等を計算し、当日熱雷の発生の有無と規模を予測しようと試みた。降水強度を定量的に予測するのは困難であったが、それらの計算値は、予報現場で大雨注意報・警報発表の必要性を判断するのに有効な資料となった。

昭和60年から61年にかけて、雷に関する調査の続きとして、Band pass filter を用いて東北地方南部のアメダス地上風の客観解析を行い、取東域と雷雲発生地域の対応を調べた。雷雲は取東地域に発生することが多く、特に雷雲発生初期においては、両者の対応が良好であった。

これらの一連の研究の成果は、仙台管区調査研究会誌等に記載されている。

昭和62年には、冬型気圧配置における福島県内の日照分布について調査した。これは、同会員が3年間の福島在勤中、予報業務に携わる中で最も興味を持ったテーマであり、とりわけ熱心に取り組んだ。この調査で、冬の福島県の日照分布は、太平洋側の地方と日本海寄りの会津地方とで、一般に考えられているほどには、はっきりと区別されることが少なく、上空の風向の違いで、様々な日照分布パターンがあることを示した。また、冬型においても会津地方の日照が比較的多

いことを明らかにした。この調査結果は、近日中に気象庁研究時報に投稿される予定である。

最近では、東北地方南部の観測点の月平均値をもとに、月別に各観測点の類似性及び相違を調べている。

このような地域気象現象の研究は今後の気象学及び気象業務の発展に寄与するものと考え、本学会はここに奨励金を送るものである。

**受領者：**橋本雅巳（広島大学附属福山中・高等学校）

**研究題目：**福山・東京間の新幹線車窓から見える雲の教材化

**選定理由：**橋本会員は昭和29年広島大学教育学部を卒業後、広島県下の公立中学校・公立高等学校の教諭を経て、昭和40年より広島大学附属福山中・高等学校に勤務、現在は副校長の職にありながら、気象を含む地学教育の改善のための研究を精力的に行っている。

昭和50年代の初めから、航空機によるリモートセンシングデータ、航空機から撮影した雲写真、気象衛星の雲画像、新聞天気図などを活用した気象教材の開発と指導を行ってきた。今回の研究はこれらの一連の研究の発展として行われたもので、新幹線で福山・東京間を4時間半で移動する間に車窓から見える雲を撮影して、天気図や気象衛星「ひまわり」の雲画像とともに

に活用できる教材の開発を目指したものである。

車窓から見える山・川・建造物などを目安に撮影地点を定め、17回の移動において各回平均55枚撮影した。天気と雲の特徴、雲の高さ、地形の影響を受けた雲の特徴や天気の推移などに注目して教材化を図った。撮影された雲の写真は、新聞天気図および「ひまわり」の雲画像と対応させることにより有効な教育利用が可能であると結論された。

今後さらに資料の蓄積・精選を行い、教育実践も重ねて質の高い教材に作り上げていこうとしている。

文部省の学習指導要領の改正が、実験観察の重視とともに、気象衛星の雲画像やアメダスの資料の活用を重視する方向で検討されている現時点において、橋本会員の研究は新しい気象教育のあり方の提案でもある。中学校・高等学校のこれからの理科の指導にあたって、自然の観察の重視と主体的な探求活動を通して科学の方法や科学的な思考力・判断力の育成の重視が指向されているなかで、気象教材に関して、学習内容の具体的事例を充実させてよりよい教材を開発していこうとする意欲は高く評価される。また、教育界において指導的立場にありながらなお、先頭に立って意欲的に研究に励んでおられる姿勢が後進に与える影響をも評価して、本学会はここに奨励金を贈るものである。

## 第4回オホーツク海と流氷に関する国際シンポジウムのお知らせ

**趣 旨：**本シンポジウムは海洋、気象、水産、生物、工学、リモートセンシングなどの学際的分野の研究者、技術者が一堂に集まり、オホーツク海や氷海、寒冷海域での諸問題について論議するものである。

**主 催：**オホーツク海・氷海研究グループ  
(Okhotsk Sea & Cold Ocean Research Association)

**会 期：**1989年2月5日(日)～7日(火)

**開催場所：**紋別市民会館

**会議の主題：**・氷海域の海洋、気象、水産、生物、リモートセンシング  
・氷の物性、力学、工学

**会議の構成：**口頭、展示発表、招待講演、パネルディスカッション

**締 切 日：**アブストラクト(200～300字)

1988年11月15日

最終原稿(図を含み4ページ程度)

1988年12月20日

要旨集をシンポジウム参加者に実費で配布します。

**シンポジウム申し込み方法：**参加希望の方は葉書に氏名、勤務先、連絡先住所、電話番号を明記してお申し込み下さい。応募用紙をお送りします。

**宛 先：**〒094 北海道紋別市南が丘町 6-4-10

北海道大学低温科学研究所 流氷研究施設

青 田 昌 秋

Tel:(01582)3-3722, Fax:(01582)3-5319